俺の周りは変と恋ばっか！

杏　代瑞

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
俺の周りは変と恋ばっか！

【Ｎコード】
Ｎ３０６９Ｙ

【作者名】
杏　代瑞

【あらすじ】
口は悪いが平凡な高校生『水無月裕哉』は、常日頃から彼を取り巻く友人によって振り回されていた。
そして、一部の人達にとって待ちに待った性転換者や異性装者を保護する法律『ＴＧＳＶ保護法』が施行され、最早歯止めの聞かなくなった友人達の行動は更にエスカレート！
幼馴染の男の娘が、お嬢様だが異常趣味の少女が、イケメンだが淡々と裕哉を狙うゲイの友人が裕哉を取り合う！
果たして裕哉は無事高校を卒業することが出来るのか！？　主要登

場人物は１００％変人という変＆恋愛コメディ作品（笑）
（話によってはＲ－１８に近い描写も出てきます。苦手な方はご注意ください）
※完全なＩＫＩＮＵＫＩ作品です。変態？　不定期更新？　だから何？ｗ

第1話『新生活の朝』

「うぅーん……」

近くで目覚ましっぽい音が鳴ってる……というか目覚ましの音だ、止めないと。

『起きないとぶちこむぞー！』とか言ってるが目覚ましには違いない、うん。

つか、普通『起きないとぶっ殺すぞー！』とかじゃねぇの？　『起きないとぶちこむぞー！』って何よ？

それはいいとして、さっさと止めるか……。

「そーれ、ぽちっとな。って、ンだよ。まだこんな時間じゃねぇか……」

今日まで春休みのはずだからな。寝よ寝よ……。

と、俺は目覚ましを放り捨ててまた布団に潜り込もうとしたが、

『さっさと起きねぇとテメェの菊〇にぶち込むぞゴラァ！！』

「んな目覚ましがあるかコラァ！！」

いきなり態度を豹変させた目覚ましに俺の熱い拳がヒット！

哀れにも目覚ましは爆砕、四散してしまった！

「あ……目覚まし壊しちまった。どうすっかな」

まぁ、ただ地面に落として電池が外れちまっただけなんだが。

今日はまだ春休み→ずっと寝ていられる→そんなに寝て大丈夫か？→大丈夫だ、問題ない

結論――このままでも問題なし。

「ンじゃ、おやすみーっと」

今度こそ布団に潜ろうとしたが、またしても俺の眠りを妨げるヤツの足音が。

ソイツは俺の部屋の前に止まると、ノックを二回して部屋に入ってきた。

入っていいかくらい聞けよ……マナーがなってないぞ。

「裕兄さんー？　起きてるー？」

ソイツは女だった。というか、俺の知ってるヤツだった。

そりゃそうだ。毎日顔を合わせてるからな。

「Ｚｚｚ……」

「裕兄さーん？　まだ寝てるかなー？　寝てるなら起こすよー？」

さて、皆さん。ここで俺はどんな起こし方をされるでしょうか。

甘～い展開を期待した人も多いと思いますが、コイツはそんなヤツじゃないのです。

「えーい！　雪流ダイビングボディプレスッ！！」

「んぎゃあああああぁぁぁ！！」

わざわざ助走をつけて俺の腹に飛び込んできた雪の手が、俺の敏感な場所にクリーンヒット！

ダイビングボディプレスに合わせてダイビングフィストをかましてくるとは……やるな、我が妹よ。

「起きた？　裕兄さん」

「お、起きたが……息子に拳を落とすのはやめてくれ……」

「ごめんねー。でも、こうでもしないと裕兄さん起きないでしょ？」

悪びれた様子もなく笑う我が妹。

コイツは水無月雪（みなづきすすき）。俺こと水無月裕哉（みなづきゆうや）の妹で年は一つ下の１６歳。

兄の俺から言うのもなんだが、年頃だというのに「おてんば」を地で行くような娘だ。

可愛い妹ではあるが行動は破天荒そのもので、コイツを制御出来る人間は俺の知る限りではたった一人だけだ。

「て、ヲイ……なにヒトのズボンずり下げてやがる！？　こら！　てのひらでさするんじゃねぇ！！」

「なにって……そのままだと痛いかなーと思って。気持ちいいかな？」

「何ぬかしてやがる！？」

……訂正しよう。「おてんば」＋「天然ボケボケ娘」だ、コイツは。

「やめんかい！！」

パンツに手を掛けようとしていた雪の手を無理矢理掴む。

このままコイツの思い通りにさせてたらパンツまで脱がされてしまうわ！

「えー」

何故か心底残念そうな顔をする我が妹、雪。そんなに見たかったのか！？

「えー、じゃない！　ところで雪？　なんでまたこんな早い時間に起こしに来たんだ？　今日はまだ春休みのはずだろ？」

雪の格好は学校行きの私服姿だった。

余談だが、俺達が通っている高校は正式な式典以外は私服ＯＫだ。

まったく、今日は休みだってのに変なヤツだ。

と、思っていたのだが――

「……え？」

「え？」

「真似しないでよ……。勘違いしてるみたいだけど、今日から新学期だよ？」

「なにィ！！」

急いでカレンダーを確かめると、確かに今日から新学期だった。

勘違いしてたのは俺のほうだったようだ。

「だからね？　裕兄さん、早く着替えないと朝ご飯抜きで学校行くはめになるよ？」

「おおう、それはいかん」

朝飯は一日の活動源だ。抜いたら今日は睡眠学習のフルコースをすることになっちまう。

今日は始業式なので授業はないのでは、とかそういうことは言ってはいけない。

俺は急いで着替えようとしたが、雪のヤツは立ち去ろうともしないで手をわきわきさせている。

「あのさ、雪？　そこにいられると着替えられないんだが？」
「ん？　着替え、手伝ってあげようかと思って」
「いいからさっさと出ていけぇ！！」
「きゃー♪」

俺が怒鳴ったのにも関わらず、雪は嬉しそうに笑いながら階段を降りていった。
まぁ、どうせ俺がなに言ったって聞きやしないし。
ちょっぱやで着替えて持ち物を確かめる。といっても今日は授業もないはずなんでカバンの中に入れるのは筆記用具とノート、それに鉄板くらいだろう。

「よし、いくか！」

全ての確認を終えた俺は、階段を降りてリビングへと向かった。

第2話『元ヤンなお母様』

「ヒャッハー！！　朝飯だぜぇ――おごぉ！！」

景気付けに世紀末モヒカンの真似をした俺の額に何やら固いモノがヒット！

床に落ちる前にキャッチしたそれは黄色いレモン。かじってみたら当然酸っぱい。

良い子のみんなは真似しちゃいけません。輸入モノは発ガン性のある薬が塗ってあるらしいからな。

「いきなり何しやがる！　お袋！！」

「あぁ！？　アンタが悪いんでしょうが。朝っぱらからくだらない真似してんじゃないよ。ほら、さっさと朝ご飯食べな！」

言いながらもテキパキと朝食を並べていく金髪のババァ。

ちなみに雪のヤツは既に半分食べ終わっていて、楽しそうに笑いながらこちらを見ている。

「いい年していつまでもパッキンにしてんじゃねーよ（ボソッ）」

「……ほう？　そんなに早く死にたいのかい？」

「……いえ、私が悪うございました。何卒この卑しい私めに朝餉をお恵み下さいまし」

即座に引き下がる俺。お袋の両手には使い込まれたメリケンサックがはめこまれていたからだ。

さすが元ヤンキー。迫力満点だぜ……。しかもタダのヤンキーじゃないからな……。

「よろしい。ほら、早く食べないと間に合わなくなるよ」

「へいへい……」

適当に返事して雪の隣の椅子に座る。

この金髪の女性は水無月濤恵（みなづきなみえ）。苗字から分かる通り、俺と雪の母親だ。年齢は……言ったら間違いなくスマキされる……怖えぇ人だし。

なにしろ若い頃は全国制覇を成し遂げた有名な暴走族『神風夜叉』のレディースの総長だったらしい。そんじょそこらのヤンキーとはわけが違う。

今でも金髪だし、部屋には当時着てた特攻服やら武器やら置いてあるし、怒らせるとメリケンサックや特殊警棒の一撃が飛んでくる。防犯グッズとして売られてるようなパチモンじゃねぇから、これがまたとんでもなく痛ぇんだ……。

「そういえば、お袋。親父がいないようだが？」

「父さんはさっさと会社に行ったよ。何でもやることがあるんだとさ」

「そか。まぁいいや。いただきまーす」

親父の紹介なんか後でもいいか。それよりも今は朝飯だ。

今日の朝飯は、と……銀シャリに目玉焼きにみそ汁に沢庵に……おおっ、納豆があるじゃねぇか！

「裕兄さんは納豆大好きだもんねー」

「おう！　納豆をＮＡＴＴＯＨと書いてしまうくらい好きだぜ！」

早速練って飯に掛けてかっこむ。からしは入れない。納豆にはからしを入れない、それが俺の信条だ。

『――先日施行されたＴＧＳＶ保護法。それから一日経った街の様子を安田リポーターに伝えてもらいます。現地の安田さん？』

最近よく耳にするようになった言葉が聞こえてきて、俺達は思わずテレビの画面に目を向けた。

「あー、そういえば昨日施行されたんだったねぇ。まぁ、ノーマルなあたしらにとっては関係ないさね」

「そうだねー。あ、でもみさちゃんは喜んでるかも？」

「ああ、あのコはそうだろうねぇ。そこんとこどうなんだい？　裕哉」

「おおむね、お袋達の予想通りだよ……」

まぁ、これが施行されたところでアイツが何か変わるわけでもねぇしな。俺を常に振り回すような奴だし。

テレビの中では、リポーターが忙しそうに街の様子を伝えている。確かにそれっぽい奴らが増えた気がするが気になるほどでもない。

そもそも、２年前に同性愛（これは元から個人の自由だが）と同性婚は法的に認められている。そして今回施行された法律で残りの奴らが法的に認められたってだけの話だ。

俺はよく知らんので詳しくは言えないが、なんでもＴＳ、ＴＧ、ＴＶといった奴らのための法律らしい。性転換者や俺の周りにいるアイツらのような異性装者のためのものってことだ。

ただ、ＴＶに関しては少し厳しくて「行為をするに当たって出来る限り美化すること」になっている。ようは、どこぞのおっさんが

すね毛も剃らないままスカート履いたり、化粧をしないままひげボーボーでしたりするのはＮＧってことだ。当たり前のことだが、著しく公序良俗に反する格好もＮＧ。パンツ一丁や水着で街中を闊歩するとか、まぁ誰もやらんとは思うが。

ふと、盆の上の膳を見ると空だった。いつの間にか食べ終わっていたようだ。

「ふう、ごっそさん！　お？　雪はもう食べ終わったのか？」
「とっくに食べ終わって学校いったよ。アンタもそろそろあのコが迎えに来るんじゃないかい？」
「おお……もうそんな時間か」

テレビの画面の左上を見ると、確かにそんな時間だった。
このままじゃ納豆臭いんで念入りに歯磨きしてツラ洗って、鉄板入りのカバンを持って玄関先に出た途端、待ってましたと言わんばかりに玄関のチャイムが鳴った。

「はいはい、今開けますよっとー」

ガラガラッと引き戸を開けると――

「おはよっ、ユウ！　早く学校いこ――ってなに朝から頭抱えてんの？」
「お前の格好のせいに決まってんだろうが……」
「んん？　これ？　お気に入りなんだけど、どこか変だったりする？」

そこには『不思議の国のアリス』から抜け出したアリス……もとい、俺限定のトラブルメイカーが立っていた。

第3話『その娘、アリスにつき』

「んじゃ、いってくるわー……」
「いってらっしゃい。裕哉、朝っぱらから辛気くさい顔してんじゃないよ！　みさちゃんも気をつけていっといで！」
「はーい、おばさん！　いってきまーす！」

わざわざ玄関先まで出てきたお袋に見送られて「ＺＵ－Ｎ」と家を出る俺と、青色のリボンに水色のワンピースの上からフリル付きのエプロンドレスを着た、髪色以外はどこからどう見てもアリスにしか見えない奴。
コイツの名前は神無月美里（かんなづきみさと）。俺の悪友で親友で幼馴染。女みたいな名前だし今も女の格好をしてるが、コイツは女じゃない。いわゆる『男の娘』ってヤツだ。
まぁ、実際美里は女顔ってか女にしか見えねぇし可愛い奴なんだが、俺に対する行動はマジでハンパない。朝起きたらコイツが横で寝てたとか、そんなことも多々あったりする。
ちなみに美里の家は俺の隣。ひさし伝いにお互いの家を行き来出来る仲だ。
そんなこんなで俺限定のトラブルメイカーな奴ではあるが、根は悪い奴じゃないので好きにさせてる。

「ユウ、本当に辛気くさい顔してるねー。そんなんじゃ幸せが逃げてくよ？」
「あー……半分はお前のせいで、あと半分は気分的な問題だ。ほっとけ」

「え？　やっぱ僕のせいなの？　これ、そんなに変かなあ……お気に入りなのに」

と残念そうに言って、その場でクルリと一回転する美里。最後にポーズ決めて「キラッ☆」。

確かに可愛いけどさぁ……そういう問題じゃねぇんだっつの！

「いくら大っぴらに出来るっつっても、初日からそれはないんじゃねぇか？」

「えー？　うちの学校私服登校オッケーだし、先生にもちゃんと許可取ったんだよ？」

マジで許可下りたんかい……。

うちの学校は元から公序良俗に反してなければ私服登校ＯＫだったんだが、男装・女装したまま登校するのはＮＧだった。

が、例の法律が施行されてからは電話で「許可を取れば異性装したまま登校しても良い」という連絡があった。

いつも思うんだがうちの学校、校則甘すぎだろ……。

「つか、美里」

「ん？　なーに？」

「そんな格好で大丈夫か？」

「大丈夫だ、問題ない。まー、ユウが言いたいことを察して答えるけど、僕は似合ってると思うし、見たい奴は勝手に見ればいいんだよ。それに――」

「それに？」

「僕がこういうの好きだってのは、もう学校中のみんなが知ってることだろ？」

「ああ、確かにな……」

思い出話になるが、あれは去年の夏くらいのことだ。
何故かは知らんが美里が女装、もう一人の奴が男装のまま学校に来て大騒ぎになったことがあった。
そのもう一人の奴は男装するような奴じゃなかったんだが、俺の悪友その3によれば「何かで張り合っていたんじゃないでしょうか」という意味不明な理由からだった。
結果、二人ともめでたく三日間の停学。この一件で美里の女装好きが全校生徒に知れ渡ってしまったわけだが、コイツは全く気にしねぇどころか、それすらも計画通りと言わんばかりに行動をエスカレートさせてきやがった。さすがに女装したまま登校するのは、今日まで二度としなかったが他の面でだ。

「まぁ、美里がそれでいいってんなら好きにしたらいいさ」
「うんうん、僕は僕のしたいことをするだけだよ。――えいっ！」

そう言って美里は俺の腕に抱きついてくる。明るい栗色のミドルロングに少女のような顔立ち、華奢な体つき。何も知らない奴から見たらいちゃつく男と女にしか見えないんだろうな。

「ちょい重たいし、視線が鬱陶しいんだが？」
「えへへー、そんなの気にしない気にしない♪」
「はぁ、もう好きにしろ。ところで美里……」

今聞くようなことでもないとは思うが、ついでなんで聞いとこう。

「んー？」

美里が顔を上げる。シャンプーの匂いか、花の香りに混じって甘い香りがする。
その甘い香りを嗅いでると意識が飛びそうになるような……気の

せいだな、うん。

「もう一つの名前、なんつったっけな……」
「もしかして、『トランス・ネーム』のこと？」
「ああ、それだ。もう決めたのか？」
「うん、『アリス』にしたよ」
「さいですか……」

なんつーか、まんまじゃねぇか！　コイツらしい名前ではあるが、もう少し一捻りするとかなかったのか！？
ちなみにトランス・ネームは例の法律の適用者専用のもう一つの名前のことだ。
別に法律で決めるようなものでもねぇ気がすんだが、「対象者は行為をする時にのみトランス・ネームを名乗っても良い」ということらしい。美里の奴は「雰囲気作りのためだよ」とか言ってたっけな。
そんなことを話してるうちに大きめの交差点が見えてくる。美里が腕に抱きついてるから歩きにくいったらねぇんだが、それでも大分進んでたようだ。
と、俺のよく知っている姿の奴が左から歩いてくるのが見えた。黒のゴシックっぽいロングのワンピースという変わった服装の女だ。

「お、あれは……おーい！　睦月！」

ソイツは俺達の存在に気づくと慌てることなく横断歩道を渡ってから、こっちに向かってきて少しばかり古風な挨拶をする。

「あら、裕哉さん。ごきげんよう――むっ！！」
「むっ！！」

が、まだ俺の腕に抱きついたままの美里を見た途端にソイツの目が鋭くなった。美里の目もいつの間にか鋭くなってて、バチバチッという音が今にも聞こえてきそうだ。

そんな二人を見て、俺は心の中でこう言った。

――アーメン。

第3話『その娘、アリスにつき』（後書き）

次回で一先ずの役者が揃います。

第４話『見た目お嬢様とイケメンの優男』

おはよう、諸君。水無月裕哉だ。
早速だが、いま俺の目の前で二人の少女（片方は『？』だが）が睨み合ってる。
今にも殴り合いが始まりそうだが、この二人の場合は喧嘩は喧嘩でも口喧嘩。なんで、俺も止める気はなかったりする。
とりあえず、心の中でゴングでも鳴らしておこうか。それ、カーンとな。

「あーら、美里さん。そんなに引っ付かれていては裕哉さんが歩きにくいのではございませんこと？」

どこぞのお嬢様を思わせる口調で美里を挑発する睦月。まぁ、コイツだと違和感があんまねぇよな……正真正銘のお嬢様だし。

「睦月ちゃんもおはよう。相変わらず黒ずくめでいかにも睦月ちゃんって感じだね！　それよりも、朝はまず挨拶から、じゃないのかなー？」

美里の反撃。つかこの二人、一見すると仲が悪いように見えるんだが、なんか楽しそうにやってる気もすんだよなー。喧嘩するほどなんとやら～って奴なんかね？

「それもそうですわね。ごきげんよう、美里さん。ぐぬぬぬ……」
「むむむ……っ」

お約束だが、何が「むむむ」だっ！
人通りも多くなってきたしそろそろやめさせるべきか、と思った途端にケツに妙な手触りを感じる。横を振り向けば「バリバリ現役でホストやってます」と言わんばかりのイケメンが俺の隣に立っていた。

「やれやれ、君たちは相変わらずですね」
「雅矢……そう言いながらてめぇはなにひとのケツ撫で回してやがる！！」
「おっと、これは失礼。ははは」

まったく、コイツは……油断も隙もあったもんじゃねぇな。
この二人――ゴシック調のロングワンピに腰くらいまである黒髪ロングストレート女とサラサラ髪のイケメン男はそれぞれ九条院睦月、高橋雅矢。俺の悪友その2とその3だ。
睦月は名門『九条院財閥』のご令嬢。雅矢は普通の家の出らしいが見ての通りの日本人離れしたイケメン。だが、二人とも性格や性癖は多少（本人たちの名誉のためにこう言っとく）まともじゃない。
なんでかってーと、睦月は蛙とかの解剖実験するたびに息が荒くなったり、みんなで焼肉屋に行けば内臓ばっかり頼んだりする奴で雅矢は行動からも大体分かるように所謂『ゲイ』の男。コイツに誰かが「アッー！」されたって話は聞かないが、本人もそう言ってる。
まぁ行動はアレだが、二人とも俺の大切な友人だ。

「おはようございます、裕哉君。神無月君と九条院さんも。そろそろ時間ですし、一旦切り上げて学校に行きませんか？」

雅矢がそういうと、美里と睦月は同時に小さく溜息をついていつもの顔に戻った。おお、さすが雅矢。この二人のストッパーなだけ

はあるぜ！

「そうですわね。それでは、早く参りましょうか」

言いながら睦月はひっそりと俺の左手を握る。

なんかコイツの手って冷たいな……冷え性か何かなんかねぇ？

「うんうん――って！　なにちゃっかりユウの手握ってるんだよ！」

「これくらい良いではありませんか。あなたは右腕、わたくしは左手。何か問題がありまして？」

「むむむーっ」

「何がむむむだ！　ほら、さっさと行くぞ」

これ以上ここにいたらループしちまいそうだ。

「相変わらず賑やかですねぇ。はっはっは」

雅矢、お前も言いながら今度は腰を揉んでんじゃねぇ！

学校までの直線道路をわいわいがやがやと歩く俺たち。右には美里、左には睦月。後ろにはイケメン雅矢と普通なら裸足で逃げ出したくなるくらい目立ってる。

が、「悲しいんだけど、これって去年からなのよね」ってことで嫌でも慣れてしまった自分がここにいる……。

「そういえば、裕哉さん」

俺を見た睦月の頬が何故か赤い……目も潤んできてるような気がする。そんだけでなんか嫌な予感しかしないが、とりあえず聞いてみることにするか……。

「ん？　なんだ？」
「今朝、活きの良い蛙を捕まえましたのよ。早速、放課後にでも二人っきりで解剖してみません？」
「やらねぇよ！　おい、さりげなくポケットからメスを取り出すんじゃねぇ！　つか、学校に刃物持ってくんな！！」
「あら、ご心配には及びませんことよ。このメスはセラミック製で金属探知機にも引っ掛からない特注品ですの」
「そういう問題じゃねぇよ！！」

この女……メスを見てうっとりしてやがる。あぶねぇ！！

「なんでしたら、裕哉さんの股間の鋭いメスでわたくしのほとを――」
「おーっとそこまでだ！　朝っぱらからなにトチ狂ってやがる！　さっさと行くぞオラ！！」
「そうだよ睦月ちゃん！　そ、それにユウのはそんなメスみたいに細くないっ！」
「ほう？　裕哉君のはそんなにビッグマグナムなのですか。それは楽しみですね」

あああ！　なんかもう収集つかねぇから引きずってでも連れてくわ！！

「ああ、裕哉さん……。そんなに激しくされてはわたくしはもう――」
「いいからお前はもう黙ってやがれっ！！」

そんなこんなで学校に到着。なんかいつも以上に疲れた気がするわ……。
睦月の奴はまだトリップしたまま。ますます変なこと言い出しそ

うだったんで、美里のカバンに何故か入ってたガムテープで口を塞いでやった。

またなんか変なことを考えてやがるに違いねぇ……恍惚してる睦月をそのままに、俺たちは今年度のクラス分けが発表されるのを待った。

第４話『見た目お嬢様とイケメンの優男』（後書き）

※この物語はＫＥＮＺＥＮものです

第5話『帰宅前も後も一騒動』

クラス分けの結果、俺たちは欠けることなく同じクラスになった。
そのあと始業式でテキトーにハゲ校長の無駄にクソ長い話を聞いて、今は放課後のＨＲ（ホームルーム）の時間だ。
いくら変わった学校とはいえ、さすがに始業式から授業はやらない。ようするに『今日はこれで終わりだ。ヒャッホーイ！！』ってことだ。ヒャッホーイ！！

「よぉし、諸君！　今日はこれで全て終わりだ！　諸君も三年生になったわけだが、おれは諸君に厳しく勉強しろとは言わん！　勉強して良い会社や大学を受けるも良し。遊んで過ごすのも良しだ！　では諸君、帰って遊ぶがいい。フハハハハハ！！」

言いたいことだけ言って颯爽（さっそう）と去っていく俺たちの担任。無駄にかっけぇー。

「帝星先生は相変わらずだね」

俺の右隣の席の美里は帰り支度をしながら、今にも吹き出しそうなのをこらえてる。
担任の名前は帝星刺鵜醒（みかどばしさうざ）。去年もだったが、今年もこの人が俺たちの担任だ。
すごい苗字と名前つーかどこぞの世紀末漫画に出てそうだが、思い切って本人に聞いてみたところ「ん？　おれとサ〇ザーは無関係だぞ。尊敬してはいるがな。ワハハハハ！！」って返事が返ってきた。
ハチャメチャな先生だが、豪快な行動振りと威厳たっぷりの言い

方が面白いのか、生徒の人気は常にストップ高だ。

「そうだな。せっかくの半ドンだし、帰りにどっか寄ってくか？」

「うん。僕はいいけど、睦月ちゃんと高橋くんはどうするー？」

俺と美里が後ろを振り向くと、二人は帰り支度してた手を止めて俺たちを見た。余談だが俺の右隣が美里で後ろが睦月、右斜め後ろが雅矢の席だ。

あの先公め……今回は見事に四人固めてくれやがって。後でスーパーボールぶつけたらぁ！

「良いですわね。わたくしは構いませんわよ。御付き合い致しますわ」

「残念ですが、私はこれから用事があって……」

睦月はオーケーで雅矢は用事ありか。四人でどっか行きたい気分だったし、また今度にするか――

「そっかー。用事なら仕方ないね。また今度にする？」

と思ってたら美里がそのまま言ってくれた。

「そうですわね。雅矢さんが大丈夫な時に致しましょう」

「すみませんねぇ。それでは私はこれで。さようなら皆さん、また明日」

「おう、また明日な！」

「ごきげんよう、雅矢さん」

「またね～っ、高橋くん」

よっぽど急いでるらしく、雅矢の奴は挨拶もそこそこに去ってい

った。
そういえば、アイツの家のことってあんま聞かねぇな。何か事情があんのかねー？
「ンじゃ、帰んべー。……ん？」
カバンを持って立ち上がると、また良からぬことを考えてそうな目をした睦月が俺の右腕に抱きついてきた。
睦月よ……今度はお前か！
「んふふ。これで裕哉さんの右腕はわたくしのモノですわ」
おい、今なんか『モノ』の発音がおかしかったぞ！
「あーっ！　睦月ちゃん！　そこは僕の特等席だよっ！！」
「あら、そのようなこと誰がお決めになったんですの？　早い者勝ちですわ」
「むむむーっ！　じゃあ僕はこっち！」
「ぐぬぬぬー」
「何がむむむだ！　てか、二年の時もだったがお前らよく飽きねぇな。ある意味感心するわ……」
突然口を挟んできたクラスメイト。「誰だっけ？　名前分かんねぇから仮にモブAとしとこう」、うん。
「ひでぇ！　オレは吉岡だ！　去年も同じクラスだったろうが！！」
「そうだったか？　まぁどうでもいいや。おいお前ら！　いつまで俺の腕に引っ付いてやがる！？　さっさと帰んぞ！！」
怒鳴っても離れそうにねぇから右腕に睦月、左腕に美里を引っ付

けたまま学校から出てやった。大分目立ってしまった気がするが今さらなことだ。

校門を過ぎてからまた睦月の奴がトリップし始めたんで、とりあえずカバンで殴っておいた。あ、そういえばカバンに鉄板入れてたっけ。なんか睦月の頭から星が飛び出てた気がすんだが……まぁ見た目に反して丈夫な奴だから問題ないだろ。

「ばいばい、ユウ。また明日ねー！」

馬鹿話に花を咲かせてるうちに家についたので、家の前で美里と別れる。

「おう！　また――って明日は休みだぞ？」

「あ、そうだった。ねぇユウ、明日遊びにいってもいい？」

「ああ、いいぞ。明日は俺も用事ねぇしな」

「ありがとっ！　じゃあ、また明日ね！！」

やけに嬉しそうにしながら、美里は自分の家に入っていった。いつものことだろうに……そんなに嬉しかったのかねぇ？

ま、いいや。俺も家に入ろうーっと。

「ＴＡＴＡただいまーっと――おわあっ！！」

引き戸を開けた途端に飛んでくる丸い物体！　間一髪よけて跳ね回ったそれを確認するとタダのスーパーボールだった。

へぇー懐かしいな。小坊くらいまではよく見たんだが最近はめっきり……ってそうじゃねぇ！！

「お袋！　わざわざ待ち構えてて息子にスーパーボール投げるたぁどういう了見だ！？」
「チッ。避けたのかい。つまんないねぇ」
今「チッ」って言ったよこのババァ！
「まぁ、あれだ。お昼のワイドショーなんざみるの、あたしに似合わないだろ？　ちょっとした暇つぶしさね。それでお昼はどうするんだい？」
「息子で遊ぶなよ……あんま腹減ってねぇから昼飯はいいわ。ん……？」
脱いだ靴を靴箱にしまおうとして、見慣れたブーツを発見する。
これは……アイツが来てるのか？
「お袋。今蕾の奴きてんのか？」
「ああ、いるよ。今は上で雪と遊んでんじゃないかい？」
どうやら、アイツが遊びにきてるのは間違いねぇようだな。つか、アイツらＨＲサボってきたのか？
……あの蕾のことだし、十二分にありえるのが怖えとこだ。
「……ん？」
２階に上がって自分の部屋のドアを開けようとした俺は、中に誰かがいる気配を感じてドアノブから手を離した。
誰だ？　雪と蕾が上にいるなら雪の部屋にいるはずだし、もしかしてボウドロか！？
なんてな。隣の部屋にいるんなら、分からないはずもねぇよなー。
二人とも俺の部屋でなんかやってんのか？

何か話し声が聞こえてくるのでドアに耳をそばだててみると――

『あっ……お姉様っ……そこは……！』

『何イイ声上げてんだ？　やっぱココがイイんだろ？』

『は、はい……そこがっ、気持ちいいんです……っ！』

『へへ、やっぱりな。雪はココが弱いもんな。アタイも燃えてきたぜ』

『あっ……んっ……お姉様ぁ……』

……えっ？　なんぞこれぇ――！！

第6話『アタイが高橋稜だ！』

えーと、これは所謂アレですか？　ドアの向こう側では百合の花が咲き乱れてるってヤツ？

ちくしょう……なんてうらやまし――じゃねぇ！　やるならてめぇらの部屋でやれよ！！

これは一度言ってやらにゃならんな。てなわけで百合百合ゾーンに突入するぜ！　ヒャッハァー！！

「お前ら！　俺の部屋でなにヤって――ズコーッ！！」

部屋に入った途端に漫画のようなお約束のバナナの皮でも踏んだようにずっこける俺。

ベッドの上で雪に稜がまたがってる。ここまではそれっぽいんだが、奴らがやってたのはタダのマッサージだった……どうせそんなこったろうとは思ってたよ！

「お、裕哉じゃねぇか。おひさー」

「裕兄さん。おかえり～」

奴らは俺の気持ちなんざ知ったこっちゃない様子で挨拶してくる。はぁ……なんか疲れたし、どうでもいいやと俺はテレビの画面に目を向けてそのまま固まった。

『あぁん？　最近だらしねぇな？』

「……なぁ、蕗？」

俺、フリーズから復帰。

「おん？　なんだ裕哉？」

「別にマッサージする時にテレビやらビデオやらを見るなとは言わねぇけどよ……なんで『ガチムチパンツレスリング』なんだよ！！」

普通はリラックスさせるために『世界の景色』とか『Ｎｉｃｅ　ｂｏａｔ．』とか流すもんだろ！？　いや、『Ｎｉｃｅ　ｂｏａｔ．』は少し違うかもだけどさぁ……さすがにこれはないわ。

「ンなモン面白いからに決まってんだろうが。なぁ、雪？」

「はい。でも、私はお姉様が良ければなんでも……」

「ハハハ、愛いヤツだ。あとでたっぷり可愛がってやるからな」

「えへへー、お姉様ぁ」

子猫のように甘える雪を笑いながら撫でる蕗。

精神が汚染されそうだからてめぇらの部屋でやれ。この、ある意味バカップルがっ！！

「雪、お前もお前だ！　マッサージくらいでイヤラシイ声出してんじゃねぇ！！」

「だって……お姉様、力が強いから気持ちよくて、つい……」

「まぁアタイは力には多少自信があるからな！　ハハハ！」

……そりゃあ、毎日毎日あんなぶっとい鎖を振り回してたら嫌でも力が付くでしょうよ。それで毎度毎度犠牲になる俺はたまったモ

ンじゃないがな！

無駄にドヤ顔をしながら、レザーの上着のポケットから「タールもニコチンもヤバイ量です」と言わんばかりに『ＤＥＡＴＨ』と描かれた洋モクを取り出した女は高橋稜（たかはしりん）。苗字から分かるかもしれんが、俺の悪友である高橋雅矢の妹だ。

服装は上下レザー＋鎖やらシルバーで常にジャラジャラさせてる。言葉遣いは聞いての通りの男言葉で、美里とは逆の『男装娘』だったりする。

雪とは見たままの仲だ。雪は稜を実の姉のように慕っていて、稜は雪を実の妹のように可愛がってる。時々行き過ぎてる気がしないでもないが、俺が口出すようなことでもねぇしな。

余談だが、稜はとあるバンドでギターを担当してたりもする。なんだっけな……そうだ、ヘヴィメタルとかデスメタルとかそんな感じのヤツ。

それはいいとして――

「稜、前にも言ったが俺の部屋は禁煙だ」

「チッ」

俺がライターを操作しようとしていた手を止めると、稜は舌打ちをしながらも素直に洋モクの箱をポケットに戻した。

俺は酒はやるが煙草はやらない。というか、煙草の臭いが苦手なんだ。よって、俺の部屋も当然禁煙だ。

「一服してから行こうと思ってたんだが仕方ねぇな。そんじゃ、アタイはそろそろ行くわ」

「ん？　今日はライブかなんかあるのか？」

「うんにゃ。ライブつーか、本番前の練習があんだよ。メンバー全員が集まっからサボるわけにもいかねーしな。じゃあなー！」

「それなら仕方ねぇか。またなー！」

「お姉様、またー」
「ああ、雪。明日アタイんち来いよ。さっきの続きしてやっから」
「あっ……。はい、お姉様……」

最後にウィンクを決めて蕗は部屋から出ていった。つか……本当にマッサージだったんだよな？　それにしては雪の顔がゆでダコのようになってるんだが……。
俺がそのことを雪に問いただすと――

「えっ……や、やだぁー裕兄さんったらぁ――！！」
「ちょ、おま！　それ中に鉄板が入って――ぎゃあああああぁぁぁぁぁ！！」

照れ隠しのあまりに暴走する雪に撲殺されかけました。これが俗に言う『満身創痍』って奴だな。マジで痛ぇわ……。
鉄板入りのカバンはすげぇ危険みてぇだから、良い子のみんなはマネすんなよー！？

その日は午後の出来事以外は特に大したこともなく過ぎていった。
一つだけ言えば、風呂場行ったら親父がマッパでポージングしてて「ん？　裕哉か。たまにゃー一緒に入るか？　ハッハッハ！！」とか抜かしやがったんで、とりあえず手加減なしで延髄斬りかまして浴槽に沈めてやった。
日付が変わった直後くらいに部屋に戻って着替えて電気を消してベッドイン！　今日はもうやることもねぇし、さっさと寝ちまおう。

「ふあぁー、今日も疲れたぜ……おやすみぃー」
「おやすみー」

……どっからか声が聞こえてきた気がすんだが多分空耳だろう。
根拠はねぇが、なんだか良い夢が見れそうだ。そう決め付けて俺は毛布を被ると、すぐに眠りへと落ちていった。

第7話『THE☆不法侵入』

「ん……」

寝起きのためか、耳元で聞こえるスズメの鳴き声と、瞼ごしに感じる日差しに俺は目を覚ました。

結構疲れてたらしく、ぐっすりと眠れたようだ。良い夢は見れなかったが、これはこれでいいことだ。

「今、何時だ……？」

机の上に置いてある目覚まし時計（今度はまともなヤツ）で時間を確認するために首ごと顔を左に向けると――

「すぅすぅ……」

「……なんでお前が隣で寝てやがる？」

いつの間にきてやがったのか、美里の奴が幸せそうなツラしながら寝息を立てていた。

そういや、寝る前に誰かの声が聞こえた気がしたっけな……まさか、あん時からもういたのか？

つか、俺確かに鍵かけたよな……？　それを考えると……美里、なんて恐ろしい子っ！！

「……ま、いいか。今に始まったことじゃねぇし」

目覚まし時計を確認すると、後2時間は寝てても問題なさそうな時間だったので再び寝ようとした俺はあることに気づいた。

……なんか狭くね？　なんつーか、こう……反対側にも誰かが寝てやがるような……。

右に顔を向けて、今度こそ俺は固まった。

「んっ……いけませんわ裕哉さん。そのようなこと……ふひひ。すやすや……」

なんつー夢見てやがる！！　つーか、なんでお前がこの家にいやがるっ！？

美里はまだいい。家が隣同士だし、ひさし伝いに行き来出来るからな。だが、睦月。てめぇは駄目だ！

「……ていっ」

背中を持ち上げてそのまま転がしてやると、漫画の一コマのように睦月の奴は転がっていってそのままベッドから転落した。「ゴキッ」って音がした気がするが睦月のことだし多分大丈夫だろ。

「痛っ！　もぅ……一体何なんですの？」

ほらな。

「おはよう、睦月。とりあえず、なんでここにいるのか聞かせてもらおうか」

寝起きとは思えないくらいの笑顔でいう俺。ただし、指をパキパキと鳴らしながら。

「あら、おはようございます裕哉さん。何でって言われましても…きちんと玄関からお邪魔させていただきましたわ」
「ほう？　玄関ねぇ……。鍵が掛かってたはずなんだがなあ？」
「ふ……このわたくしの七つ道具のひとつである『ぴっきんぐ・つーる』というものに掛かれば、鍵のひとつやふたつ――」
「睦月。ひとついいことを教えてやろう」
「はい？」

不思議そうにしながらベッド端に寄ってきた睦月に俺は大声で言ってやった。

「それは不法侵入って奴だあああぁぁぁぁぁぁ！！」
「ぐえぇぇぇ！　裕哉さん首絞まってますわ！！　ギブギブぅぅー！！」
「おおっと水無月選手！　ここでチョークスリーパーだぁ！！　これは苦しい！　九条院選手耐えられるかぁ！？」
「なんでプロレスの実況風なんですの！？　ギブ！　ギブしますわー！！」
「なお、この試合はギブアップ無効となっております。あらかじめご了承ください」
「後告知なんてひどすぎますわー！！」

なんてことをしているうちに、ようやく美里の奴が目を覚ましたようだ。

「おはよ、ユウ。……さっきの音はなーに？」

プロレスもどきじゃなくて音のほうかよ！　しかも反応おそすぎっ！！

「気にすんな。もう起きるならさっさと下いって顔でも洗ってこい」
「んぅ……起きる。あれ？　なんで睦月ちゃんがここにいるの？」
「タダの不法侵入だ。後で逆さ吊りにしてやろうと思ってるんだが、美里もやるか？」
「え〝……？」
「うん、やるー。家からバナナガード持ってくるねぇ……」

駄目だコイツ。まだ寝てやがる……早く起こしてやらんと。マジで家戻ってバナナガード持ってきかねん……。
美里は非常に寝起きが悪い。寝惚けてる時のコイツはなにするか分からんので早めに目を覚ましてやる必要があるのだ。

「いいからさっさと顔洗ってこい」
「んにゅ……」

俺が指さすと美里はぬぼーっとした動きでドアを開けて階段を降りていった。
代わりに下から上がってきたお袋が顔を見せる。

「裕哉、さっきみさちゃんが上から降りて――おや、睦月ちゃんも一緒だったのかい？　二人とも相変わらずだねぇ」

にやにや笑いのお袋。けっ！　ババァがにやついてもキモいだけだっつの……――すみません、めっさ怖いんで特殊警棒取り出しながら殺気を叩き付けないでくださいマジで。

「はい、濤恵小母さま。ご無沙汰しております」

睦月の奴は既に復活していた。相変わらず見た目に反して頑丈な奴だ。

「どうだい？　睦月ちゃんも朝ごはん食べてくかい？」
「そうしたいのは山々なのですけど……今日はこれから妹と遊ぶ約束がありますの。またの機会にお願い致しますわ」

睦月の妹かぁ。いるのは知ってんだが会ったことどころか名前すら知らねぇんだよなあ。睦月の奴はその辺のこと話したくねぇみたいだしよ……。ま、急いで聞かなくてもそのうち話してくれるだろ。

「そうかい？　それじゃあ仕方ないねぇ。裕哉、アンタも仕度してさっさと下りてきな」

そう言ってお袋は下に降りていった。
顔を見合わせる俺と睦月。さっきのプロレスもどきの続きでもいいんだが、ここはひとつ聞いてみることにするか。

「なぁ、睦月」
「はい、何です？　裕哉さん」
「お前……結局なにしにきたの？」
「何って……裕哉さんの隣で寝たかっただけですけど？」

マジでそれだけかよっ！！　コイツんちと俺んち、どんだけ距離があると思ってんだ！？

「そうですわねぇ。裕哉さんのご希望とあらば、ベッドの上のプロレスごっこでも――」
「やらねぇよ！！」

第7話『ＴＨＥ☆不法侵入』（後書き）

不法侵入は犯罪です。ダメ、絶対！

第8話『いつもより騒がしい朝飯』

「あれ？　睦月ちゃんは？」
「うっせぇから逆さ吊りにして放置してきたわ」
「うわぁ……本当にやったんだ。ユウってば鬼畜……」

んな簡単に信じんなよ……。これが街中なら知らねぇ場所に連れていかれてンぞ？

「冗談だ。なんでも妹と遊ぶ約束があるらしくてな。さっき帰った」
「そうなんだ。全然気がつかなかったよ」

そりゃ奇遇だな、俺も気づかんかったわ……。戸を開ける音も聞こえなかったし、アイツのご先祖様はＮＩＮＪＡか何かか！？
あの後、睦月の奴は薄くて黒い服（多分、寝間着代わりだ。というか小ぶりな胸の膨らみが丸見えなくらい薄かった）を脱いで、そこら辺に脱ぎ散らかしてあった（見たまんまの意味だ。どうみてもお嬢様のすることではないだろう）自分の服を着ると、音もなく玄関から出ていった。

「おや、睦月ちゃんはもう帰ったのかい？」

お袋が台所から持ってきた膳をテーブルの上に置いていく。

……――

はっ！　あまりの自然さにスルーしちまうとこだった！

「なんで台所にいたお袋が知ってやがる！？」
「あぁ？　さっき睦月ちゃんが玄関から出ていったじゃないか。裕哉、アンタも気配の一つや二つ読めないと、この先生きていけないよ？」

あの、母上？　普通の人間は気配なんてまず読めないと思うんですがね……。つか、気配の一つや二つ読めないと生きていけない世界ってどんだけやべぇんだよ……。

「あはは……」

ほら見ろ！　美里の奴も苦笑いしてんぞ！？

「このナレーター面白いね！」
「テレビのほうかよ！！　しかもそこ苦笑いするとこじゃねぇだろっ！？」
「ん？　なにかおかしい？」

美里の奴は頭にハテナ浮かべて首をかしげてやがるし、お袋はお袋でしたり顔で笑ってやがるし！　もういいや……と俺は膳に並べられた朝飯を見る。

今日は銀シャリに味噌汁に焼き鮭に漬け物か。む……ＮＡＴＴＯＨがないだとっ！？

「お袋ー！　ＮＡＴＴＯＨがないぞ！！」
「あ？　誰かさんがよく食べるから納豆は今切れてんのよ。なんなら、代わりにＮＡＴＯ弾を用意してやろうかい？」
「いえ、いりません……いただきます」

ライフル弾なんか食えっか！！

「ユウは本当に納豆好きだよねー。いただきまーす♪」

もぐもぐ……うむ、ＮＡＴＴＯＨには敵わないが焼き鮭もいい。これぞまさしくジャパニーズ・ブレックファストって奴だな。

「ん？　そういや今日も親父がいないな。仕事なのか？」

「うんにゃ、今日は休み。父さんは朝早くから釣りに行ったよ。運がよければ今日の夜は魚だねぇ」

「ああ、親父は釣りが趣味だったな。一応期待しておきますか」

てな感じに朝飯を食ってると、いかにも「寝起きです」と言わんばかりに目をこすりながら二階から雪が降りてきた。

「ふぁー……おふぁよーう……Ｚｚｚ」

「おはよう、雪。立ったまま寝るんじゃないよ。ほら、ご飯出来てるからさっさと顔洗ってきな」

「ふぁーい……」

お袋に背中を押されて洗面所に向かう雪。なんかヨタヨタしとるようだが……大丈夫か？

と、そんな心配の必要はなかったようで、面を洗ってさっぱりした雪が自分の席に座って元気に挨拶してきた。

「おはよー裕兄さん、みさちゃん」

「おはよう、雪。髪がボサボサのまんまだぞ。蔭の家に行く前に直してけよ？」

「おはよっ、雪ちゃん！」

「はいよ、朝ご飯お待ちどう。なんだい？　雪は蔭ちゃんの家に行くのかい？」

「うん、お姉様が昨日の続きをしてくれるって……」

雪よ……何故そこで顔を赤くする！？　やっぱ昨日俺が帰ってくる前は百合ってたのかっ！？

「かっかっか！　やっぱ若いモンはいいねぇー。食べられすぎないように気をつけなよ？　裕哉達は今日はどうするんだい？」

「そうだなぁ……」

そういや遊ぶ約束はしてたが、なにをするかは全然決めてなかったわ……。どうすっかなー。

「うーん、今日は天気もいいし、散歩しながら街まで出ようよ」

ナイスアイディアだ、美里！

「おう、そうだな。てなわけで俺らは街で遊ぶわ。ごっそさーん」

「ごちそうさまでした♪　それじゃー僕は仕度しに一度家に戻るね。おばさん、朝ご飯ありがとでした！」

「あいよ、お粗末様でした。またいつでもおいで！」

「はーい、それじゃお邪魔しましたーっ」

さて、俺も歯磨いて顔洗って自分の部屋に戻りますかね――と思ったら雪とお袋がこっち見てニヤニヤ笑ってやがる。

「あんだよ？」

「いやー、みさちゃんってホントいい子だと思ってねぇ。裕哉、アンタ１８になったらさっさとみさちゃんと結婚しちまいな。あんないい子、他にいないよ？」

「け、結婚って……あのなぁ」

「駄目だよ、お母さん。みさちゃんには睦月先輩や高橋先輩という強力なライバルがいるんだから。一筋縄ではいかないよー」

ちょっと待てぇ！　睦月は分かるが俺と雅矢はそんな目で見られてるのかっ！？

確かに奴の行動はちと行き過ぎな面もあるが、周りからそう思われてたとは……。

「けっ、言ってろ。俺は部屋戻るわ」

「はいはい。今日は一日中晴天らしいから、ゆっくり楽しんできな」

俺の背中では雪とお袋が、声は小さくだがまだ笑ってる。

なんとなく恥ずかしくなった俺は、さっさと歯を磨いて面洗って、わざと音を立てて階段を駆け上がって自分の部屋に戻った。

第9話『春風のアリス』

「おっせぇなアイツ……何のんびりしてやがんだ？」

美里から「１０時過ぎに家の前で待ってて」というメールをもらい、１０時前から家の前で待ってるが、そろそろ１０時を２０分を過ぎようとしている。俺が大人か、「サツだぁ？　ハッ！　上等だコラァ！！」ってな感じにバリバリの不良だったら足元に多数の吸殻が落ちてる頃だ。

ぶっちゃけ俺は性欲をもてあます……もとい、暇をもてあましていた。

右手でピースサインを作って煙草を吸う真似をしてたら誰かが美里の家から出てきたが、美里と背が同じくらいで、見た目年齢十代後半か二十代前半の女性だ。とりあえず美里の奴じゃねぇことは確かだな。

「こんにちは、裕(ゆう)ちゃん。煙草は１８になってからじゃないと駄目よー？」

その人は俺の姿を見るや否や、小走りで掛けてきて「めっ」って感じに人差し指を立ててきた。うーむ、テンプレ動作だけど可愛いよなあ、この人……。

「うっす、おばさん。いや、そこは嘘でも二十(はたち)歳って言っとくべきじゃないっすかねぇ……」

「大丈夫よ。うちのお父さんも１８からやってたし」

「さいですか……」

俺はそれだけ言って、ため息をついた。
腰くらいまである、脱色したみたいにきれいな栗色の髪をヘアゴムで一つに纏めて、家事の途中なのかうさぎ柄のエプロンを掛けているこの人の名前は神無月美恵子（かんなづきみえこ）。苗字から分かるように美里の母親だ。
絶対そうは見えないが、年齢は今年で35らしい。ある日なんとなく聞いてみたら普通に教えてくれた。つまり、旦那さんと結婚して合体してすぐに美里が誕生したわけだ。おお、お盛んお盛ん。
雪と同じくらいの天然属性持ちなので、たまに言葉のキャッチボールしてるはずが思いっきり後逸したり、大暴投で隣の家のガラスをやっちゃったりするような人。あくまでも比喩だが、本当にやりそうなのがこの人の恐ろしい所だ。
ちなみに旦那さんは至って普通の温厚なサラリーマンだが、今日は休日出勤でいないらしい。まぁ、こんな感じの母親と父親だから美里のような奴が生まれた……んだよな？

「男の子は黙って待ってあげるくらいの余裕を持たないと駄目よ、裕ちゃん。みさちゃんならもうすぐ来ると思うわ」
「そうっすかぁ。アイツは仕度長いからなあ……」
「そうねぇ。じゃあー、次は裕ちゃんにも手伝ってもらおうかなー？　みさちゃんもきっと喜ぶわ！　あ、ほら――みさちゃん、仕度出来たみたいよ？」

美恵子さんに言われた俺が目を向けると、美里の奴がおずおずといった感じに玄関から出てくるところだった。

「お待たせ、ユウ。ごめんね、遅くなっちゃって……」
「いあ、そんなに待っちゃいねぇよ。みさ……と？」

母親と同じように小走りで掛けてくる美里の全身を見て俺はそのまま固まった。

昨日のようなコスプレなんかじゃねぇ、女の子の姿そのまんまの美里がそこにいた。

「うんうん、可愛いわみさちゃん♪　やっぱり私の見立てに狂いはなかったわね。ほら、見て裕ちゃんっ！　神無月アリスちゃんよー。可愛いでしょー♪」

「ど、どうかな、ユウ……」

「あ、ああ……可愛いぞ。すごく似合ってる」

俺は、薄く化粧もしているせいか、いつも以上に女に見える美里の姿を前にそれしか言えなかった。

明るい栗色の髪は首よりも長いミドルロングを少し大きめの黄緑色のリボンで飾ってて、春の芽吹きを思わせる薄い新緑色の太もも中丈のワンピースによく合ってる。まだ4月で肌寒いこともあってボレロ風の、レースで飾られた白いカーディガンを羽織っているがこれがまたいい。ソックスもワンポイントが入った白のニーソで清楚さを際立たせてる。白い帽子があれば大人っぽいが、ないから子供っぽさを残した大人って感じだ。

実際に春風の妖精がいたらきっとこんな姿をしてるんだろう。俺はボーッと美里の姿を見ながらそんなことを考えていた。

「本当？　よかった……ユウに気に入られなかったらどうしようかと思ってた……」

「ばっか！　そんなこと言うわけねぇだろ？　マジで可愛いっての……アリス」

「あっ……」

きっと今の俺の顔は赤くなってるんだろう。照れ隠しに美里の頭

をくしゃくしゃに撫でてやった。
美里の顔も赤い。というか、美恵子さんの前で何やってんだ俺たち……。

「そ、それじゃ……いこっか」
「お、おう……そうだな」
「二人とも、いってらっしゃい♪」

にこにこ顔の美恵子さんに見送られて、街に向かって歩き始める俺たち。
……ここで終われば問題ないんだが、この人の場合は確実に――

「みさちゃーん！　お母さん、みさちゃんが朝帰りしてきてもちゃんと暖かく迎えてあげるからね！　昨夜はお楽しみでしたね、って♪」

ほらきた！
おい、そこの天然系人妻！　笑顔で問題発言すな！！

「え、えええっ！？　あ、朝帰りって……」
「子供は何人かしら？　今から楽しみだわー♪　ああ、幸生さん……子供達はこうやって親元から巣立ってゆくものなのね……！」
「……」

駄目だこの人妻。早く何とかしないと……。大体男同士でどうやってガキつくんだよっ！　仮に美里が性転換して女になったとしても無理な話だぞ！？

「お母さん、ああなったら2時間は戻ってこないから……ほっといて、いこいこ」

「そうなのか……初めて見たわ」

美恵子さん、ある意味睦月のような人でもあるのか……。またひとつ新しい面が見れたな。

「ねぇ、ユウ。手つないでもいい？」

「ん……」

身長差が１０ｃｍくらいあるので上目遣いに聞いてくる美里に、俺は黙って左手を差し出す。

「ありがとっ。やっぱりユウの手って大きいね」

――今のお前の手は穏やかな春の陽気みたいだな。暖かいよ。

思わず言いそうになったその言葉を寸前で飲み込む。自分でも不思議に思うくらい、自然に出てきそうで恥ずかしかった。

だから――

「そうか？　これくらい普通だろ？　んで、まずはどこ行くんだ？」

どうでもいい言葉で、そのうち喉から勝手に飛び出そうなその言葉に蓋をする。そして、いつもの調子の俺に戻るんだ。

「んー、少し公園によっていこうよ」

そうだな、昼までちょっとした花見を楽しむのも悪くねぇ。

と、俺はそう思っていたんだが――

「あそこの屋台のホットドッグ、久しぶりに食べたくなっちゃった」

「ムードもへったくれもねぇなオイ！！」
「てへっ☆」
やっぱり、神無月アリスになっても美里の奴は美里だった！

第９話『春風のアリス』（後書き）

ようやく恋愛物っぽくなってきた感じですかね。
それでは次回、第１０話『本日はデート日和也　～　神無月アリスの場合　～　午前』お楽しみにー。

第１０話『本日はデート日和也　～　神無月アリスの場合　～　午前』（前書き）

※今回は美里（アリス）視点です

第１０話『本日はデート日和也　～　神無月アリスの場合　～　午前』

まだ少し肌寒い風が吹く桜の並木道をユウといっしょに歩く。左手はユウの右手と繋いで、右手に食べかけのホットドッグを持ちながら。

ホットドッグはもう通り過ぎた公園に定期的に来ている屋台で買ったもの。最後に来たの1年くらい前だったっけ……久しぶりによってみたんだけど、お店の人は僕たちのことを覚えてたみたいで「ヘイ！　お久しぶりネーおフタリさん！」って言ってくれた。こういうときってなんだか、わけもなく嬉しくなるよね。

それにしても、ワンピースの裾から風が入ってきて太ももと……ま、股がスースーする。うぅ……これならワンピースじゃなくて長めのスカートにしたほうが良かったかなあー……。

でも、ユウは「似合う」って言ってくれたんだし少しくらい我慢しよう。

ホットドッグを包んでた紙を、通り道に置かれてたゴミ箱に入れて僕はユウの顔を見る。

僕の大好きな、ちょっぴり不良だけどすごく男の子らしくてきりっとしてるユウの顔。ぽーっと体が熱くなってくのを感じながら見てたら逆にユウに見られちゃった。

「ん？　アリス。俺の顔に何かついてるか？」

僕のことをもうひとつの名前で呼ぶユウ。

『アリス』は僕が僕自身に対してつけたトランス・ネームだ。

だけど、別に僕は自分のことを『アリス』と思ったことはないし、似てると思ったこともない。ただ、『アリス』という少女が好きな

んだ。その名前には無垢で可憐な少女ってイメージがあるから。きっと、僕もそんな子になりたかったんだろう。

「ううん。ユウの顔を見てただけ」

「あん？　俺の顔なんか見ても面白くねぇだろ……」

ユウがいつものようにぶっきらぼうに顔を桜に向ける。

違うよ、ユウ。

面白いとか、面白くないとかそういうことじゃないんだ。ただ、僕がユウの顔を見てたかっただけ……それだけなんだ。

ユウは嫌がってるかもしれないけど、今の僕はそれだけで十分幸せな気持ちになれるから。

「桜、きれいだな」

「そうだね」

しばらく桜を見ながら歩いてたユウの呟きに相槌を打つ。

今は五分咲きといった感じかな。つぼみと花が半々くらい……5月になればすっかり葉桜になっちゃうんだろうな。

「少し、寂しいね……」

僕は思わず呟く。

「ん、何がだ？」

「桜がさ。あと1ヶ月もしないうちにピンクと白から緑一色に変わっちゃうんだろうな、って」

「そうだな……。でも、俺はそれはそれでいいと思うんだ」

「え？」

「桜ってのは花が咲いてるうちは見る奴の目を楽しませる。葉桜は

葉桜で見る奴の心を和ませるもんだ。癒しつーかなんつーか……上手くは言えねぇけどよ……」

桜を見上げながら、空いてる人差し指でほっぺたをかきながら言うユウに僕は小さく頷いた。

「ふふ、上手く言えてたよユウ――きゃっ！」

突然吹いてきた突風に僕はユウから手を離して両手でワンピースの裾を押さえる。少し間があったけど見られてないよね……？

「み、見た……？」
「何をだ？」
「だから、その……僕の……パンツ」
「見てないぞ？」

よかった……見られてないみたい？　ほっとため息をついた僕だったけど――

「……若草色のしましま（小声で）」
「ユウのばかぁ！！　やっぱり見たんじゃないかぁー！！」
「ぐぎゃあああぁぁぁぁ――！！」

デリカシーのないユウのお腹に渾身の力を込めたパンチ一発！
なんか顔がにやけてたし、そうだとは思ってたよっ！

「ふ……やるなアリス。世界を狙えるいいパンチだった……ぜ……ガクッ」
「はいはい。芝居はいいからさっさといくよ、ユウ」

「ガクッ」とか自分で言ってる時点で芝居ってバレバレじゃん…
…ユウってホント演技が下手なんだから……。
そんなことより、ユウにパンツ見られちゃった……顔が赤くなっちゃってユウの顔まともに見れないよぉ……どうしよう。

「チッ、ばれてーら」

全然痛がってない様子で立ち上がるユウと再び歩き始める。
今までとひとつだけ違うのは、僕がユウを見れないことだけ……
それだけなのに、なんだか寂しい気持ちになる。
なんかやだな、こんなの……。
いつか僕はユウに抱かれたいと思ってるし、パンツ見られたくらいでこんなになってちゃダメだよね……よし！

「ねぇ、ユウ」
「ん？　なんだ……」
「さっきのことは許してあげるから、キスしてよ」

気づいたら――自分でも信じられないくらいに大胆な言葉を僕は吐いていた。
今までここまで大胆になったことなんてなかった。せいぜいユウの腕に抱きついたくらいだ。
でも、ユウのことだから「恥ずかしいからやんね」とか言ってしてくれないんだろう。
そう思ってた――

「しょうがねぇなー」
「え、ユウ？」

でも、ユウはめんどくさそうに後ろ髪をかきあげながらも歩く足

を止めて僕に顔を近づけてきた。ここまで来ちゃったら今さら「やめて」なんて言えない。覚悟を決めて僕は静かに目をきゅって閉じる。

何も見えない暗闇の中、自分の心臓の音だけがとても大きく聞こえる……とくん、とくんって。

「んっ……？」

そっと触れる柔らかい感触。でも、それを感じたのはくちびるじゃなくてほっぺただった。

「こ、これでいいだろ……さっさと行くぞ！」

熱におかされたような僕の顔も赤いけど、ぶっきらぼうに僕の手を取って歩き出すユウの顔も少し赤くなってる。

そんなユウを見て、僕はくすっと笑って――

「もぉ……ちゃんとしてくれなかったから今日のお昼はユウのおごりだよっ♪」

そう言ってやったら、ユウも笑い返してくれた。

やっぱり、こうやってユウの側にいるのが僕にとって一番の幸せ。

携帯電話で時間を確認すると１１時半。今日という日はまだまだ始まったばかり。

ユウとめいっぱい楽しんで、ときどき甘えて、とにかく楽しい１日にしよう。

公園の桜の並木道を抜けた僕とユウは、今度はゲームの話をしながら街に向かった。

第１１話『本日はデート日和也　～　神無月アリスの場合　～　午後』（前書き）

※今回も美里（アリス）視点です

第１１話『本日はデート日和也　～　神無月アリスの場合　～　午後』

「おいしかったねー♪　ユウ」
「確かにうまかったが……当分あの店の近くは通れねぇぞ……」
「う〝……悪かったってばぁ」

あんな目立つようなことしちゃったもんね……その時のことを思い出したら……うぅ、僕も少し恥ずかしくなってきたかも……。
――街に着いたら１２時ちょうどになってたので、僕たちはお昼ご飯を食べることにした。何を食べるかは少しだけ揉めたけど、街で一番美味しいと評判の洋食屋さんのオムライス。僕は冗談で言ったつもりだったんだけど、ユウがおごってくれるって言ったから甘えることにした。
お店は少しだけ混んでたけど待たされることもなくすぐに座れて、注文してから３０分くらいで卵はふんわりとろーり、中のチキンライスはほっかほかの具だくさんなオムライスが運ばれてきた。卵で出来たお家ごと中のチキンライスを口に入れるとふんわりとろーりのほっかほか。うーん、美味しい♪
ユウも向かいで舌鼓を打ちながら食べてたけど、食べるのに集中してるみたいでお話してくれない。そのうちに少しだけ悪戯心が沸いてきた僕はオムライスのスプーンをユウのほうに向けてやったんだ。「はい、あーん♪」って。
最初は戸惑ってたユウだったけど、僕が一歩も引かないことを知ると観念して食べてくれた。そしたら――仕返しのつもりだったのかな？　ユウも同じことをしてきたんだ。もちろん、僕は喜んで食べたよ。なんだか、自分のを食べるより美味しかった♪

そんなことをお互いに繰り返してたらいつの間にか白い皿だけになってて、気づいたら店員さんもお客さんも白〜い目でこっちを見てた……。あはは……ここはファミレスとかじゃなくてただの洋食屋さんなんだから当然だよね。場所を考えないと、だね。

そんなわけで、勘定してそそくさと出てきた僕たちは、今デパートの洋服売り場を歩いてる。

「あ！　あれなんかユウに似合うんじゃない？」

「ほう、どれどれ……オイ……」

僕が指さした服を見るユウ。しばらく時間が止まったようにフリーズしてたけど、気づいたら頭に拳骨落とされてた。それなりに痛い……。

「なにすんのさー！」

「なんで喪服なんだよ！　しかも女の着物じゃねぇか！！」

「えー。ユウってほら、海外の映画やドラマでよくあるじゃないか。お葬式で女の人が黒いワンピースみたいなドレス着て、顔をメッシュのような黒布で隠してるの。ああいうの似合うと思うんだけどなー」

「いらね……」

ユウのお気には召されなかったみたい。似合うと思うんだけどなー。ユウってスタイルから黒とかすっごく似合いそうだし、和服でも洋服でもいけそう。

『未亡人〜水無月裕哉〜　美丈夫の乱れた喪服』――ってこれじゃある種のスケベＤＶＤじゃん。なに考えてんだろ僕……。でも、少しいいかも……あふん。

「それより、服を試着しにきたんだろ？　どの店なんだ？」

「あ、そうだね。この近くだからいこっ」

と、僕がユウの手を引いて行きつけのお洋服屋さんに向かおうとした時だった――

「おや？　裕哉君に神無月君ではありませんか。奇遇ですねぇー」

え？　この声まさか……。

聞き覚えがある声に僕とユウが振り返ると、そこに紅葉色の生地に何の花かは分からないけどキレイな花の柄の着物を着た美人さんが立ってた。あれ？　高橋くんの声が聞こえた気がしたんだけど……気のせい？

僕とユウが顔を見合わせていると、その美人さんはニッコリ笑って手を振ってきた。

「私ですよ、雅矢です。まぁ、今は『桔梗』とお呼びください。神無月君は今は『アリス』でしたっけ？」

「声は分かったんだけど、すっごい美人さんだから高橋くんって分からなかったよ。うんうん、今は『アリス』って呼んでねー！　僕も『桔梗』ちゃんって呼ぶから♪」

それにしても、桔梗ちゃんすごいなぁ。着せられてるんじゃなくて、もう何年も前から女性の着物を着こなしてるって感じで男性的なところはひとつも見えない。ウィッグや化粧も和装に合わせてるし、すごくイイ♪

「え？　雅矢、なのか……」

ユウはまだ信じられないようで、目を点にしてる。

「はい、雅矢ですよ。実は、私の祖母方の家が呉服屋でしてね。遊びに行くたびに着せ替え人形にさせられているうちに病みつきになりまして、暇な時はこうやって女装しているのですよ」
「おいてめぇ……言いながらジーパン越しにひとの息子を撫でてんじゃねぇよ！！」
「ははは、これは失礼。ついうっかり裕哉君のモノを愛でたくなりまして。ところで、お二人はデートの真っ最中でしたか？」
「ちが――」
「うん、そうだよー。だから、邪魔しないでね？　桔梗ちゃん」

ちがう、なんて言わせないもんっ！

「はっはっは。それはそれは……馬に蹴られないうちに退散したほうが良さそうですねぇ。それでは、私はこれで失礼しますよ」

くるりと背を向けてエスカレーターで下の階に降りてく桔梗ちゃんが見える。なんだか、歩き方も和服のときの歩き方に合わせてるし……キレイに決まってるなぁ。
まっ、それはいいとしてっ！

「それじゃ、いこ！　ユウ♪」
「お、おう……ンなに急がなくて店は逃げねぇっての！」
「あーあー聞こえなーい♪」

僕は聞こえない振りをしてユウの手を引いて、そんな遠くないお洋服屋さんに向かって歩き出した。

――行きつけのお洋服屋さんでファッションショー（大きいサイ

ズも扱ってるお店だから嫌がるユウもいっしょに♪）もどきをやって、食べ物フロアでデザートを食べて、ゲームセンターで遊んでデパートから出たら、もう外は茜色に染まっていた。
桜の並木道を歩いてた時間よりも冷たい風が、白い春用のボレロ風カーディガンと髪をはためかせては通り過ぎていく。

「ふう、今日は楽しかったな！　なんか色んなものが見れたし、失ったものも多い気がするがな……」
「そうだねー。でもカッコいくて可愛かったよ？　ユウのゴシックドレス姿♪　やっぱり、ユウは黒が一番だねっ」
「そっかぁー？　まぁ、アリスが喜んでくれたならそれでいいが……そろそろいい時間だし、帰るか？」

ユウに言われて携帯電話の時計を確かめる。時間はもう午後６時になろうとしている。
でもね、ユウ……僕（みさと）にとっての今日はまだ終わってないんだよ？

「公園……」
「ん？」
「少しだけ、公園によりたいな……」

ユウは少しだけ考えたみたいだけど、すぐに顔を上げて笑いかけながら「いいぜ」って言ってくれた。
これからは睦月ちゃんも、そして多分……高橋くんも今までよりもずっとユウに絡んでくるだろうし、こんな機会はもうあまりないかもしれない。
だから、ユウに伝えるんだ。僕の、今の気持ちを――。
こうして、僕たちは夕陽の光に追われながら桜咲く公園に向かった。

第１２話『黄昏どきの告白』（前書き）

※今回もやはり美里視点です

第12話『黄昏どきの告白』

「……はぁー」

ますます冷たくなってきてる風に身をふるわせながら自分の手をあっためる僕。姑息ではあるけど、何もしないよりはマシだと思う。

ユウは近くの自販機に飲み物を買いにいってる。もう少ししたら戻ってきてくれるはず……。

「寒いね……」

言葉にするとますます寒くなった気がする……。でも、これは多分体だけじゃなくて心も冷えてきてるから……。

まだかな、ユウ……早く戻ってこないかな。

「……」

ダメダメ！

こんな状態でユウとなにを話せるって言うの？

しっかりしろ、神無月美里。いつもの調子を思い出して！　ユウが戻ってきたら言うんだ！

深呼吸深呼吸――すぅはぁ、すぅはぁ……うん、落ち着いてきた。

「……」

僕は西の空のかなたに少しずつ姿を消していく夕陽を眺めながら、

新緑色のワンピースの裾を直してベンチに座りなおした。
キレイな夕陽は好き。でも、キレイな月はもっと好き。
お月さまを見るたびに穏やかな気持ちになるから。今日もあと2時間もすれば夕陽は完全に沈んで、白いお月さまが顔をのぞかせるんだろうね。
――って、ぼんやりしながら夕陽を眺めてたらほっぺたにあったかいものを押し付けられた。

「ひゃあっ!?」
「なーに黄昏てんだ？　ほれ、ココア」
「あ、ありがと……」

戻ってきたユウからホットココアの缶を受け取る。ユウが隣に座ったのを見てからプルタブを開けて一口飲むと、ココアの優しくて甘い味が広がって少しだけ体があたたかくなった。

「きれいな夕陽だなー」

缶コーヒーを飲んで夕陽を眺めるユウ。そんなユウを横目で見る僕は、彼のなんでもない動きが気になって仕方なくて――

「うん、そうだね。ホント、キレイな夕陽……」

そんな当たり障りのない言葉でお茶をにごしてしまう。

「……」

黄昏に暮れる無言の公園。近くには他に人どころか猫一匹さえいない、完全に僕とユウだけの空間。チャンス……だけど言葉が出てこない。心のなかに浮かべた言葉を声にしようとしても、結局出せ

なくて元の場所に引っ込んでしまう。

「なぁ、アリス。なんか話あるんだろ？」

ユウが僕のほうを向いて言う。

「……うん。だけど、もうアリスの時間はおしまい。これは美里としての気持ちだから」

僕はたっぷりと溜めを作ってから頷いて言った。

「……そか」

ユウは何も聞かないで、ただ頷いてくれた。

でも、相変わらずユウは意地悪だね……こんなときの僕がどんな話をするか知ってるくせに。ユウがそれを分かってないはずがない。長い付き合いだもんね。

だけど、こうやっていつもユウを振り回して困らせてる僕もいけないよね……。だから今日――いまここで、はっきりと言おう――。

「ユウは……」

「あん？」

「僕のこと、好き？」

「いきなりナニ言ってんだ？　好きに決まってるだろ？」

ユウは迷うことなくそう言ってくれた。それが、ユウの偽りのない本心ということは分かる。でも――

「それは……友達としてでしょ？」

「……」

こんな言い方ずるいと思うけど……僕は馬鹿だからこんなことしか言えない。

知ってるよ、ユウがこういう恋愛に興味がないことくらい……。幼稚園からの、長い付き合いだもん。

ワンピースの裾を握りしめながら、僕はユウと真正面から向き合った。

「僕はユウのこと好きだよ。家族も雪ちゃんも睦月ちゃんも高橋くんも好きだけど、世界で一番ユウのことが大好き！　幼稚園の頃から気になって、小学校で好きになって、中学校でもっと好きになって、高校でもっともっと好きになって――今になって、やっと言えたんだ……！」

そう、やっと言えたんだ。心の底に閉じ込めておいた僕の気持ちを。

だから僕は――

「美里。俺は――」

今はこれで満足、とユウの唇に人差し指を当てて先を言わせない。

「言わないで、ユウ。今すぐ返事がほしいって言ってるんじゃないんだ。今日は僕の気持ちを伝えたかっただけだから。だから今は――」

僕は戸惑うユウに顔を寄せて、なにかを言おうとしているその唇を唇で塞いだ。

「んっ……」

生まれて初めてのキスは大人っぽくちょっぴり舌を入れてみたりして、たったの１０秒くらいだったけど甘い甘い時間に満足した僕はゆっくりとユウから離れて、

「――今はこれで十分幸せ。これが、僕の素直な気持ちだよ、ユウっ♪」

僕は今日一番の笑顔を見せて、ユウの胸に飛び込んだ――。

☆　★　☆

――裕哉と美里、共に二人は周りには他に誰もいないと思っていた。だが、それを終始見ていた目が遠くにあった。

「……」

銀色の髪は尾が長めのツインテール。しかし銀髪には合わない、そのまま社交パーティに赴けそうな赤色のワンピースを着て、目元をサングラスで隠した怪しい姿の少女がそれを見ていた。

偶然か必然かは分からない。だが、確かに少女は見ていた。裕哉と美里のキスシーンを。

「ナツキお嬢様！　探しましたぞ！」

後ろから駆けてきた執事風の老人に、少女は振り向いてすぐに声を掛ける。

「ねぇ、ゲンゴロウ」
「はい、なんですかな？」
「あのふたり……誰か知ってる？」

少女の目線と同じ方向に顔を向けて、『ゲンゴロウ』と呼ばれた老執事は僅(わず)かに目を細める。

「あのお二方ですか？　……おお、男性のほうは水無月裕哉様ですな。女性のほうは……状況と髪型から察しますに神無月美里様と思われます。どちらも睦月お嬢様のご友人にございます」

それを聞いた『ナツキ』と呼ばれた少女が、誰かを思い浮かべて嘲笑するような笑みを浮かべた。

「ふーん、あのヘンタイお姉さまにあんな友達がいたんだ。ユウヤとミサトかぁ……覚えておきましょ」
「ナツキお嬢様……実の姉君をそのように言うものではありませんぞ。ささ、大分冷え込んで参りました。これ以上はナツキお嬢様のお体に障ります。お屋敷に戻りましょうぞ」
「ゲンゴロウはいちいちうるさいなぁー。ま、これ以上ここにいても仕方ないみたいだし、もう帰りましょ」
「左様でございます」

（なかなか面白そうなふたりだし、ちょっとお姉さまに聞いてみようかな？）

歩きながら『ナツキ』は楽し――否、愉しそうに笑う。そんな『ナツキ』を見て深いため息をついた『ゲンゴロウ』は見えない位置から裕哉と美里に一礼し、踵を返して老人とは思えない俊敏さで少女の後ろに従(つ)いた。

第１２話『黄昏どきの告白』（後書き）

裕哉とアリスのデートはこれで一先ず終わりです。
次話からは再びコメディパートに入ります。
『ナツキ』は今回は顔見せだけです。今後どう絡んでくるかは今は皆様の想像にお任せします。果たしてそれが合っているかどうかは後のお楽しみ。

第１３話『Ｏｈ！　ＳＡＫＥ！！　～　準備は怠りなく　～』

次の金曜日。

今は授業中だが世界史担当の帝星先生が「よし、諸君！　授業はここまでだ！　残った時間は各自好きにするが良い。フハハハハ！！」と言ったので、いつもの４人で話をしてたときのことだった。

「そうだ――」

「京都に行こう」

おいおい……返しは悪くなかったが雅矢の奴が困った顔をしてるぞ、美里よ。

「俺は京都に行くぜ。誰がなんと言おうとな」

いいからさっさと行け！　つか、睦月……お前がやると絶望的に合わねぇから。なんつーか……京都に向かったはずが、気づいたら稚内にいるような感じだわ、うん。

「ははは、それもいいですが明日から週末ですし、みんなでお酒飲みませんか？」

ほう、お酒とな。そういえば、最近あまり飲んでなかったたな。

未成年の癖して最近とは何事だ！　とは言わないように。それに、君たちの世界と違って軽アルコール飲料なら１８歳から飲んでもよいのだよ。ハッハッハ！

……あと1歳足りないだろ、という突っ込みはナシな。

「明後日の方向を見て一体何をしてますの？　裕哉さん」

睦月の冷静な突っ込みが入る。どうやらウケなかったようだ。

「なんでもねぇよ。それより、久々の『Ｏｈ！　ＳＡＫＥ！！』というわけですな？　雅矢殿」

無駄に時代劇に出てきそうな悪代官顔をする俺。

「ええ、『Ｏｈ！　ＳＡＫＥ！！』です。それに、あと2週間もすればＧＷ（ゴールデン・ウィーク）でしょう。その時の計画も立てれたら良いと思いまして」

「なるほどな、俺はいいぜ！　美里と睦月はどうだ？」

俺がふたりのほうを向くと、何してんだか……美里と睦月はお互いの頬をつねり合っていた。俺の視線に気づくとすぐにやめて姿勢を整えたが、お前らホント仲いいな。

「特に予定もないし、僕はオッケーだよー」

いつもの調子でオーケーサインを作る美里。

あのときはあんなだったのに俺も美里も気にしないでいつも通りの日常を過ごしてる。

いや、きっといつも通りじゃないんだろう。それを表に出してないだけで。

「わたくしもですわ。秘蔵のお酒を持参致しますわね」

手首に包帯が巻かれた手で髪をかき上げながら言う睦月。

昨日家で怪我したときのものらしいんだが、「なんでもありませんわ」と本人が言ってるから大したことではないんだろう。
それにしても睦月秘蔵の酒か……なんか嫌な予感しかしねぇんだが？　それでも一応聞いてみますかね……。

「ちなみにどんな酒なんだ？」
「それはもちろん決まってますわ。アルコール度数１００％の――」

――このとき、俺は気づいてなかった。俺たちの背後に誰かが立ったことを。

「それはタダのエチルアルコールだろうがあぁぁぁぁ――！？」

ここが教室なのも忘れて叫ぶ俺だが、周りの３人どころか他の連中まで静まり返ってやがる。
よくよく見れば、『奴らは言っている。後ろを見ろと』。
それに気づいた俺が大きな影に後ろを振り向くと――

「ほほう……貴様ら、おれの前で酒の話とはいい度胸だな？」
「げぇっ！　帝星先生！！」

ジャーンジャーンジャーン、ってな効果音が今にも聞こえてきそうだが、今はそれどころじゃねぇ……。やっべぇな……どう言い訳すっかな。
と、思ってたら雅矢が妙に真剣なツラしながら帝星先生に抗議？し始めた。

「それは誤解です、帝星先生。私達はお酒の話をしていたのではなく、『Ｏｈ！　ＳＡＫＥ！！』の話をしていたのです」
「ほう、『Ｏｈ！　ＳＡＫＥ！！』とな。では、高橋。その『Ｏｈ

！　ＳＡＫＥ！！』とやらを説明してもらおうではないか」
「はい。『Ｏｈ！　ＳＡＫＥ！！』とは、とあるアメリカ人が『まぁ！　なんて見事な鮭！！』とランカー級の大きさに驚き、感謝しながら食べたのが始まりで、明日私達もそれに倣って大きい鮭を４人で分けて食べよう、という話だったのです」

なんという嘘八百！　よくもまぁそんなベラベラと出てくるもんだ。ある意味関心しちまうぜ。

「ほう……」

しかし感心したように何度も頷く帝星先生。まさか雅矢のデタラメ話を信じたのかっ！？

「まぁいい。貴様ら、酒の話をするのは結構だがここは学校で今は授業中だ。もう少し小声で話すが良い。あまり酷いようなら罰として帝星十字陵の建設を手伝わせるぞ」

デスヨネー。

ちなみに帝星十字陵は、この国一の建設会社『帝星建設』が総力を上げて建設中の建物だ。建物つーか、俺たち庶民では顔も拝めないようなお偉いさんの墓らしいが詳しいことは知らん。

「じゃ、続けるか。場所は前みたいに俺んちでいいか？」

帝星先生が教卓に戻ったのを見て『Ｏｈ！　ＳＡＫＥ！！』の話を再開する俺たち。さっきより少しだけ小声で。

「いいんじゃないかな。僕は賛成♪」
「わたくしもかまいませんわよ」

「私もです」

前回もそうだったが特に反対はなかった。

となると今日は全員泊まりだな。美里と雪にも手伝ってもらって、2階の客間を少し片付けておくか。

――帰ってからこのことをお袋に話したら二つ返事で了承された。前ンときもそうだったから予想はしてたが。

睦月と雅矢が何本か持ってきてくれるらしい（睦月に関してはエチルアルコールは持ち込まないように釘を刺しといた）がそれじゃ足りないだろう、ってことで酒の用意もしてくれるようだ。

それを聞いてた雪もメンバーに追加。前回はまだ15ということもあって参加させなかったが、16だしそろそろいいだろう、というお袋の一声で今年は参加してもいいことになった。ま、そうとくれば一緒に地獄を味わってもらいましょうかねぇ……フフフ。

だが、このときに俺は気づくべきだったんだ。

普段騒がしいお袋が静かに笑ってたことに――。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3069y/

俺の周りは変と恋ばっか！

2011年11月29日19時55分発行